

尾道商業会議所記念館 第32回企画展示解説

2017年6月9日～2017年11月8日

テーマ **メイド・イン・オノミチ・トイ**
～ものづくり職人が造った郷土玩具～

古くから商都尾道と称され、商業活動が盛んな「商人のまち」として知られる尾道は、同時に「職人のまち」としての歴史を併せ持ちます。

石工の集住した「石屋町」、鍛冶職人では「鍛冶屋町」と、職人街が旧市街の一角に形成されるなど、職人たちのモノづくりは、商人による商業活動と並んで活発な様相を見ました。

とりわけ尾道石工と尾道鍛冶は全国にその名が知れわたる技術を有していました。石工では神社の鳥居や狛犬などに優れた石造物が多く、尾道鍛冶では中世以来の刀剣に始まり、近世以降には船の錨が造られ、「尾道錨」というブランドとして高く評価されました。

歴史的にはこの石工と鍛冶がよく語られるところですが、今一つ忘れてはならないのが「木工」の職人です。「木工」の職人街は「杓屋小路」（別名として叶小路とも）が該当します。「杓屋」は柄杓に因むもので、柄杓や桶、或は神棚などの木工品を作る職人が寄り集まっていたことから由来します。

木工職人達は本業の余暇を用いて、木製の玩具を創出しました。それが尾道発の郷土玩具として今に伝わる「田面船」です。一説には尾道に出入りした千石船を模したとも、また、神功皇后の軍船を模したとも伝えられ、港町尾道らしい郷土玩具であるといえます。

田面船の他には、尾道の夏祭りの一つ、祇園祭に登場する「三体みこし」をモチーフにしたミニチュア玩具も創り出されるなど、職人達のハンドメイド・トイは更にレパートリーを拡げ、それは余暇の域を超えるものになるまでの昇華を見ました。

そうした職人のまち尾道の一端を、懐かしくも愛らしい郷土玩具の世界からご紹介してみたいと思います。



木工の職人街だった杓屋小路
江戸時代(1821・文政4年)の「尾道町全図」から
(全図原本：尾道市立中央図書館蔵)

【参考解説】郷土玩具の世界

日本各地、その地域で古くから伝承されて来た手製の玩具を「郷土玩具」と呼び、素朴でどこか温かみのあるのが共通した特色としています。

地元の産物を用いて作られ、社寺の授与品や祭礼土産の内に見られる例が多く、郷土玩具が信仰とも深く結びつく一面もっています。

郷土玩具の定義については幾つかあるようですが、古くから伝わる玩具と、比較的新しい時代に生み出された玩具を「創生玩具」とし、郷土玩具とは別に分ける見解も聞かれます。

多くの郷土玩具を収集し、また、その世界を研究された(故)保田素一郎氏(元尾道市文化財保護委員)は、著書の中で郷土玩具について次のように解釈されています。

「郷土玩具—それは伝説と縁起を基調として郷土の特色を裏付とし、素朴で巧まぬ技法の上に、その時代相を身につけて生まれたおもちゃ。別の言葉を以って表せば、読む玩具、話題を持つ玩具であって、教育的であり、宗教的である。それは特権階級の権力と財力に飽かせた名人芸の、美術工芸の結構につける置物に対し、庶民の心からなる祈り、願いの要求に対する所産であり、また子を思う親心の発露の賜である」『広島県郷土玩具—民俗学的研究—』(尾道文化財協会発行、昭和38年)

郷土玩具と一口に言っても多種多様で、和紙を貼り合わせた張り子、土(泥)人形、木・竹・藁細工等々、実に様々です。材質の他、用途・目的別の分け方として、保田氏は次のように分類しています。

- ◆開運 … 商売繁盛(ダルマ等)、縁結び、大漁・豊作祈願(田面船等)
- ◆厄除 … 疫病除(身代わり雛、蘇民将来等)、火難除、雷除、航海安全
- ◆病気平癒 … 疱瘡除、虫封じ、腫物
- ◆出産育児 … 安産(犬張子等)、子授、子育て(節句人形等)
- ◆土産物 … 観光土産玩具(創生玩具がこの内に属す)

こうした郷土玩具は、各地の民俗資料館に見られる他、専門的に扱う施設として、近隣では福山市松永はきもの資料館(旧日本はきもの博物館・日本郷土玩具博物館)、岡山県倉敷市の日本郷土玩具館があります。



杓屋小路での郷土玩具作りの風景
昭和20年代頃—保田素一郎氏撮影—
(保田家旧蔵 尾道学研究会アーカイブ)

メイド・イン・オノミチのオモチャ① 田面船 (たのもぶね)

尾道における郷土玩具の中で筆頭格に挙げられるのが「田面船」。柄杓の職人街に因む杓屋小路にあって、古くは匠屋(屋号・○の中に上=まるじょう)と称した本城政吉氏(代々「政吉」の名を家業上で襲名)の手によって長く受け継がれて来たものでした。全盛期には十数軒の職人が、柄杓や神棚造りの片手間を利用して田面船が製作・販売されていましたが、その最後の一軒が本城氏でした。



田面船

(おのみち歴史博物館蔵)

田面船は民間信仰と結びついた玩具で、旧暦8月1日(新暦では9月初め頃)に見られる「八朔」(八月朔日)、別名「タノモ・タノミ祭り」(田の実祭りとも、地域によって呼称には多少の差異あり)に登場します。田の言葉が象徴するように、農耕の実り豊かならん事を神に祈る行事で、时期的に台風到来の頃でもあり、風の災いを防ぐ祈りも含まれるとされます。

農耕に関わる田面船だけに、買い求めたのは郊外農村部の人々が中心でしたが、商人町・職人町の尾道町内にあっては、男子の生まれた家への贈答品ともなりました。尾道地方では古く八朔の日、男子のある家が田面船(四輪のコロ付)を曳いて、土地の産土神・氏神様へ参詣するのが慣わしで、江戸後期に編まれた地元地誌『尾道志稿』(亀山士綱編著)にもその習俗が記されています。

船であることについては、尾道へ入港した北前船・千石船をモデルに形作られたとするのが通説的ですが、本城家においては、尾道浦へ寄港した神功皇后の軍船を象ったものとし、その日が八朔であり、豊作に恵まれた故にという異説もあります。

田面船は60cm程度の大から15cm程度の小までの間で、およそ4種のサイズが見られ、加えて戦後の郷土玩具ブーム時に土産用として製作されたミニサイズと大小様々の型が見られます。図柄は鶴、松、鳥居、達磨が主流で、二代目政吉(秀造)氏は更に多くのレパートリーを持っていたといいますが、それらの作品は本城家にも遺されていない為、二代目作は幻の田面船となっています。

材料の木材には、柄杓の部材でもあるヒノキとマツを用い、工具は神棚造りに用いるのと同じであったようです。



郷土玩具・田面船作りの風景

(保田素一郎著『広島県郷土玩具』尾道文化財協会発行 1963 より)

メイド・イン・オノミチのオモチャ② 田面 (たのみ) 人形

田面船とセットで八朔に見られたものが「田面人形」という、「しん粉細工」によって作られた人形で、八朔の日にこれを作って食べるという慣わしがありました。

八朔の一週間前になると、田面船と同じく中心部(十四日元町~長江界限)の10軒ほどの店で売り出され、山間部の小売商や島の行商人が仕入れに集まりました。街中の行商人達は八朔時期になると、市内や近郷近在に売り歩き、人形は一個40円、戦前は10銭ぐらいで売られたようです。

人形の種類は、男子用としては馬乗鎮台(15cm)、金時(金太郎・13cm)、角力取(17cm)が見られ、女子向きには三味線弾き(17cm)、犬(10cm)、踊子(3cm)が見られました。



田面人形

(おのみち歴史博物館蔵)

この内の踊子の人形にあっては、人形の下部に穴を開け、その中に黒い虫(蛾)を入れて、この虫が動くと人形が自然に動き出すのを楽しむ趣向も見られたそうです。また、お初穂(神様に捧げる稲穂)として神棚に供える光景も見られました。

製法は、米の粉をやや固く練って蒸し、臼でよく搗いたものを餛のようによくこね回して粘りを出し、これには食用油を少量加えて手に附着するのを防ぎますが、これに餅米を入れると絶対良品は出来ないとされます。彩色には赤、青、黄、緑、紫の食紅が使用されました。

人形は時間の経過で硬くなり、ちょっとした振動でも壊れやすいということから、保存には不向きな面がありました。その為、現在は資料用に紙粘土で作られたものが保存されている状況です。



田面人形作りの風景

(保田素一郎著『広島県郷土玩具』尾道文化財協会発行 1963 より)

メイド・イン・オノミチのオモチャ③ 三体みこし

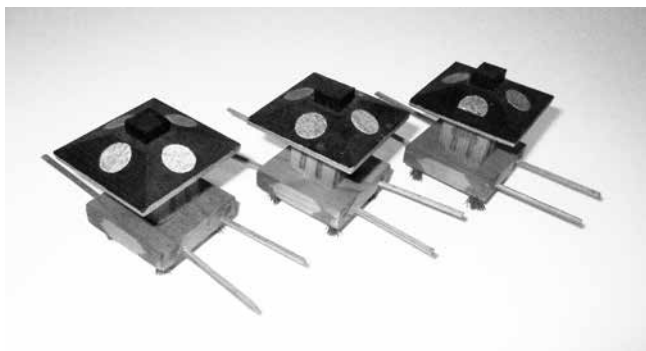
神の幟の下、三つの巴が荒々しくも勇ましく渦を巻く—尾道祇園祭名物の「三体みこし廻し」を、可愛らしいミニチュアで再現したものがこちらの郷土玩具です。製作者は田面船に同じく、杓屋小路最後の職人・本城政吉氏でした。

田面船と打って変わって、作りは至ってシンプル。金色の紋所(紙貼)を付した黒屋根、鳥居を描いた胴体、マッチ棒程の担ぎ棒を付した台座の3パーツからなる極めて素朴な造り。特徴としては、台座下の四隅に棕櫚の毛が取り付けられており、これがみこしの足となり、神輿を据え置く床几的な格好を呈しています。しかし単に床几的機能だけをもって、シュロの毛が取り付けられているわけではなく、子ども達が遊べるための仕掛けでもあります。畳や板の上に三体を並べ、トントン相撲の要領で畳や板の上を叩けば、トコトコ、クルクルと三体が動き出し、互いにもつれ合ったり絡み合ったりしながら、揉み合う“けんかみこし”の様相になるというものです。郷土玩具がその名の通り本来は子ども達が楽しむオモチャであるという事を再認識させられます。

保田氏の調査資料によれば、三体みこしの郷土玩具には3種類見られたようで、一つが主流となる前述のシュロ付き三体、もう一つには、八坂神社の紙幟を備え、その周囲に同型の三体が取り付けられ、傍らの糸車を回せば、幟の周りをクルクルと回り出す、まさに三体廻しの情景が再現される仕掛けのものもありました。

更に今一つ、10 cm角程度のもので、三体みこしそっくりに彩色した大型タイプのものも売られていたそうですが、こちらは現物が残っていない(確認されない)ので、詳細を知る事が出来ません。

これらの品は、祇園さんの祭日に立ち並ぶ露店(夜店)で売られ、祭り土産として買い求められていたものです。



三体みこし
(おのみち歴史博物館蔵)



三体みこし(幟回転式)
(おのみち歴史博物館蔵)

メイド・イン・オノミチのオモチャ④ ベッチャー面と持ち物

ジキチン、ベッチャー、ジキチン、ベッチャー…急調子の囃子太鼓にのって、鬼たちを囃し立て、泣き笑う子ども達の歓声に沸き立つ一宮さんのベッチャー(吉備津彦神社、通称・一宮神社の例祭)は、尾道の秋を代表する風物詩として名高い祭礼です。子ども達にとってはベッチャー面は恐ろしくもあり、また、ヒーローの様にカッコ良く映るものでもあります。面をかぶってみたいという子ども達の憧れを実現させてくれるのが、ベッチャー面を模した張り子面です。ソバ、ベタ、ショーキー、獅子頭とフルセットが揃い、サイズによって大・中・小がありました。小は幼児向けサイズといった感じで、作りも素朴且つ簡素なものです。大になるとより精巧になり、玩具というよりも飾り面的な質になっています。獅子頭は、伊勢を始め各地の郷土玩具・民芸品の内によく見るものと同一形態で、紐を手繰って口が開閉するようになっています。



ベッチャー面
(左から、ソバ、ショーキー、ベタ)
(おのみち歴史博物館蔵)



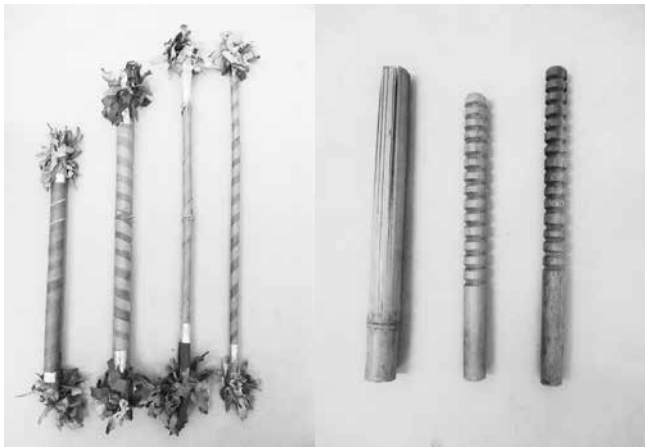
獅子頭
(おのみち歴史博物館蔵)

面と共にベッチャーには欠かせない小道具として、ソバとベタが持つ祝棒とショーキーの持つササラ竹があり、こちらも張り子面と並んで祭の日に売られていました。祝棒には太く装飾が派手な特製と、細く簡単な作りの並製の2種類がありました。

何れの作者も、(故)橘高誠氏の手によって伝えられたもので、橘高氏が彫られた木型の上に、紙を幾重にも重ねて形状が象られ、最後に彩色、植毛を施して仕上げられ、紙製とはいえどなかなか頑強な作りになっています。

ベッチャー張り子面がいつ頃から世に出たのかについて、保田さんが橘高氏から得た証言によれば、「作り方は先代から伝わったもので…」とあり(保田氏著『広島県郷土玩具』・1963(昭和38)年)、戦前にまで遡る可能性も出て来ます。

祭当日、ベッチャーの一行と共に移動式の屋台で売られる光景が平成以降も見られましたが、現在では見られなくなって久しくなっています。



いわいぼう
祝棒

ササラ竹

(おのみち歴史博物館蔵)

ベッチャー面壁掛け



観光用途で比較的新しい時代に創出されたもの=創生玩具(観光土産玩具)の一つと見られる。現在は販売されている形跡がない。
(おのみち歴史博物館蔵)

ベッチャー祭りの沿道で見られたお面売りの屋台



(橘高誠氏旧蔵 尾道学研究会アーカイブ)

ベッチャー人形



ベッチャーの三鬼神(ソバ・ベタ・ショーキー)を人形化したものだが、張子面や持ち物と異なり同様のものが見つからない。面などと共に祭礼土産として売られていたのか否かなどの詳細は不明。
(おのみち歴史博物館蔵)

幻の尾道人形

尾道の郷土玩具の中で、幻とされているのが、通称「尾道人形」と呼ばれる土人形です。

保田氏の調査によれば、菅原道真の寄港伝説を縁起とする御袖天満宮(長江1丁目)の授与品として頒布されていたようで、「三次人形」(広島県三次市の郷土玩具)に見るような「天神」を主に、天神様に因む「牛」などがあったといえます。しかしその黛元を含め具体的な情報に乏しく、「近郊の農村にそれらの天神が残っている」と、保田氏の著書『広島県郷土玩具』の内記述にあります。

人形の系統としては、三次でもなく、又、「三原人形」(三原市で作られた土人形・廃絶)、「常石人形」(福山市沼隈町常石で作られた。後に張子人形となって今に続く)の系統とも異なり、それはどこか「伏見人形」(京都)に近いものを保田氏は感じておられたようです。そしてその根拠になるものを、伏見人形関連の文献(文献名の記述がなく詳細不明)に探し求められました。それによると、幕末から明治にかけて、伏見人形の販路(得意先)は中四国方面にも及び、海路の船便として、又は、尾道からの仕入れ人が京都まで仕入れに出向いている経過が確認されています。

この事実からして、加えて地元周辺での独自の生産情報を全く聞かない・伝えないことを含め、尾道天神人形については、伏見人形など、他所から仕入れられ、天神さんの授与品として売り出されていた可能性が高いようです。

以上のように、尾道で生産されたと認められる証拠が乏しいことから、伏見人形など他所から仕入れられたものが流布された可能性が推測されます。



尾道天神人形

(おのみち歴史博物館蔵)